メディカルテラス

身体への負担少ない大腸がんの手術は？

大腸がんを患い、手術が必要といわれました。最近、傷が小さく、身体への負担も少ない手術があると聞きましたがどういうものですか。

回答者
笛吹中央病院消化器外科
石井 正紀医師

いしい・まさのりさん 1993年東海大医学部卒。同大消化器外科講師、2010年から笛吹中央病院消化器外科医長。日本内視鏡外科学会技術認定医、日本外科学会指導医、日本消化器外科学会専門医。

小さい穴から患部切除

出血抑え早期の離床も

―大腸がんで手術が必要ということですが。

どのような治療が必要かは大腸がんの進行度、主に①壁深達度②リンパ節転移③遠隔転移―の3項目で決めます。①～③を組み合わせて判定し、治療法を選択します。

大腸の壁は、食べ物が通る内側から粘膜層、粘膜下層、固有筋層、漿膜の4層で構成しています。がんは粘膜から発生し、漿膜へ進みますが、一般的に進行が粘膜層、粘膜下層までならば早期大腸がん、固有筋層以上に進んでいると進行大腸がんと呼びます。

がんはリンパ管を通って全身に存在するリンパ節に飛び火します。転移は腫瘍の近い所から始まり、進行度が高くなると転移個数が増え、腫瘍から離れた所のリンパ節も腫れてきます。

一般的に言われる転移は遠隔転移のことで、特に血流に乗って転移し、肺転移、肝転移などのことをいいます。

―手術にはどんな方法がありますか

大腸がんの場合、可能な限り切除することが、再発、転移を少なくします。手術には大腸カメラを使用する内視鏡手術と、おなかを切って行う外科手術があります。

内視鏡手術は、がんの進行が粘膜層、粘膜下層の浅い部分までで大きさが2センチ未満の場合に、リンパ節転移がないと判断し、大腸カメラで局所のがんを切除する方法です。肛門からカメラを挿入し、腸の内側からがんを切除します。

外科手術は、局所のがんのみの切除では不十分な場合に行い、リンパ節を含めて切除します。ただし、大腸のリンパ節は主に腸間膜という脂肪の中に埋もれており、手術中にすべてのリンパ節で転移の有無が確認できません。そこで、がんがある大腸と一緒に、転移がありそうな腸間膜ごと切除します。

―相談者の言う手術とは？

外科手術の中には、おなかを大きく切る開腹手術と、小さな穴をいくつか開けて行う腹腔鏡下手術がありますが、おそらく後者のことでしょう。腹腔とはおなかの中、鏡はカメラのことを意味します。つまり、おなかの中に直接カメラを入れて行う手術で、胃カメラや大腸カメラを使う内視鏡手術とは異なります。

腹腔鏡下手術では、おなかに5ミリ～1センチの穴を開け、炭酸ガスを送り込み、おなかの壁を持ち上げます。ドーム状になったおなかの中にカメラを入れ、その映像をテレビモニターで見ながらほかに数カ所の穴を開け、専用の器具を入れて手術を行います。リンパ節を含めた切除範囲は通常の開腹手術と同様です。

―腹腔鏡下手術の良さは？

最大の利点は体に優しいということです。傷が小さく、美容的に優れているだけでなく、術後の痛みも少なく、早期の離床が可能です。肺炎など術後の肺合併症も少なくなります。

映像が見にくくなるため、手術では徹底して出血を防ぎます。出血量は開腹手術の1～2割に抑えられます。さらに、腸管が空気に触れず、手でも触らないため腸管の動きが術後に悪くなりません。術後の癒着が少なく、腸閉塞になりにくいのもメリットです。順調ならば術後約1週間で退院が可能です。

―腹腔鏡下手術が可能なのは。

手術の技術の進歩などにより、大腸がん全体に保険が適用されています。しかし、進行横行結腸がんと下部直腸がんは技術的に難しいとされています。また、極度の肥満の人も向きません。大腸がんのほか早期胃がんや胆石、総胆管結石、鼠径ヘルニアなどの手術も可能です。

腹腔鏡下手術の様子

進行大腸がんの腹腔鏡下手術1カ月後の傷（中央はへそ）